

のではなからうか。

小川鼎三先生とキューバの勲章

古川 明

かねて小川鼎三先生の御病氣のことは知っていたが、あんなに早くおなくなりになるとは思わなかった。私は先生が日本医史学会の理事長に就任されたころ、医史学会に入会したので、そのときからずっと先生の御指導を受けることができた。先生は一見華奢にみえたが、ヒマラヤの検険隊長もなさったり、巨大な鯨の解剖もなさり、御丈夫だったので、もっと長生きして頂きたかったのに、病魔に侵されたのは、かえすがえすも残念なことだった。

先生は几帳面で、且つ非常な勉強家だったので、私が順天堂大学の医史学研究室を訪れたときは、いつも窓ぎわの机に向かって、著述か読書をしておられた。先生の名著「医学の歴史」(中公新書)は昭和三十九年刊行され、簡明で教科書的であり、とくに卷末の医学史略年表は、私にとって利用価値が大きいので、参考書として刊行直後から常用している。

いまから約十五年も前になるが、第七十回の日本医史学会総会(昭和四十四年)で、私がキューバの医学切手を中心に、痘瘡の歴史について報告したとき、小川先生が座長を務めて下さった。私の報告を終ったあと、先生はずっと前に、キューバの勲章を受けたことを、簡単に追加して下さいました。日本の医学者で、キューバの勲章を受けたのは、おそらく先生一人だけだろうと、そのとき私は大変驚いた。

受章の経緯のちにわかったが、先生が一九五四年、第十四回国際医史学会総会(ローマ)に出席されたとき、キュー

バの医史学者の要請で、フィンライ Carlos Finlay (アメリカ式には「フィンレイだが、「フィンライ」が正しい)の、蚊による黄熱伝播説の功績顕彰に署名したことに對しての受章だったという。小川鼎三先生のそのときの記載文は、日本医史学雑誌(六卷一号十八ページ、一九五五)によると、つぎの通りの日本文とその英訳文であった。

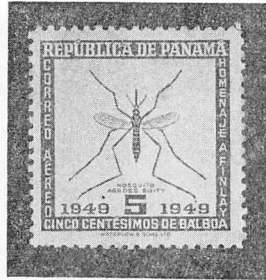
「余は細菌学の専門家ではないが、フィンレイの業績に関して、キューバの科学者や歴史家が永い間調べて得た結論は正当であると信ずる。」

受章は昭和二十九年(一九五四)十二月三日、東京のキューバ大使館で行われ、それには緒方富雄先生が同伴陪席されたとときいている。勲章の名称は私は知らない。

第二次大戦前から、私は医学切手に興味を持ち、日本医史学会入会後は、医史学の研究にもこれを利用してしたが、前記の総会から数年のち、キューバの医学切手で不明な点がみつかったので、東京のキューバ大使館に質問の手紙を出した。しかし、いつまで待っても返事がこないの、なかばあきらめていた。ところが思いがけずにも、ある日突然キューバの厚生省から郵便物が届いたので、開封してみたら、キューバの「医学切手書」(A5判、全七十四ページ)だった。

それまで私は自分の国だけの医学切手を集めて解説した書物は、世界のどこの国のも見たことがなかった。キューバのこの医学切手書は、用紙、印刷、装丁など、いずれも上等とはいえないが、豊富な図を用いて、簡単に切手の解説を記載している。私にとって、大変貴重なものとなった。この書は「キューバの医史学叢書」の第四十九号で、一九七〇年に発行され、表題は「キューバの切手でみる医学」である。

本書の最終ページに記載されている本叢書の一覧表によると、第七号が「第十四回国際医



史学会総会におけるフィンライの発見の功績顕彰」となっているから、その号に小川先生の署名のときの記載文が掲載され、先生はこの号を受領されたことと思われる。この叢書は非売品で、とくにキューバの医学史に興味を持って研究する人だけに無料で配布すると記してある。

キューバの医学研究の貢献者である小川鼎三先生のおかげで、私も入手困難なこの切手書をたやすく入手できたので、そのことを先生に報告して、喜んで頂いた。それ以来、私はキューバの医学切手の調査には、しばしば本書を利用している。記載文はスペイン語だが、私は辞書の助けによれば大体のことがわかる。以上に記載した当時のことを想い起こし、先生の霊の御冥福を祈りながら、この追悼文を記した。

最後に、フィンライ顕彰の切手写真を掲載させて頂きたいと思う。

(1)フィンライの生誕一〇〇年を記念して、一九三四年キューバで発行された肖像切手。

(2)一九五〇年パナマで発行された黄熱を伝播するネッタイシマカ *Aedes aegypti* の切手。パナマは黄熱の撲滅によって、パナマ運河を開通完成させたので、フィンライの功績を顕彰してこの切手を発行した。

フィンライの切手はこのほか数種ある。

追憶の小川鼎三先生

大塚 恭 男

恩師小川鼎三先生が去る昭和五九年四月二十九日に長逝されてより、早くも数カ月が経過した。この一月一八日には鎌